



在校生との 結びつきを 強めよう

桜友会長 内藤頼誼 (昭29高)

平成19年5月24日の桜友会総会で亀井泓先輩の後を継いで会長に選任されてから、はや半年、瞬く間に過ぎたように感じられます。亀井会長ご在任の5年間、桜友会の活動が目覚しく強化されたことは、ここに繰り返すまでもありません。私は前会長の敷かれた路線を継承し、さらに発展させていくことを基本に、会の運営に当たっていきたくて考えております。これまで新米の会長を支えてくださった会員各位に、この場を借りて厚く御礼申し上げますとともに、これからもさらなるご協力をお願いいたします。

桜友会は「平成19年度基本方針」として、①学習院への支援強化②会員向け活動の充実③組織の強化の三本柱を掲げてきました。もちろん、これらの課題は単年度に達成できるものではありません。可能なところから辛抱強く、実現への努力を重ねていく必要があります。

①に関して、私がとくに重視しているのは、在校生との結びつきです。いま世の中で「学習院らしさ」が認められているとすれば、それはやはり皇族の方々も学ばれる学校としての品位を残しているからで、これを失ってはならないと考えるからです。そのためには、母校の伝統を身につけた卒業生と在校生の交流の場をできるだけ増やしていく必要があるでしょう。とりわけ平成20年度から桜友会の基本会費を学校側が代理徴収する方向で折衝が進んでおり、これが実現すると、学生は大学3年次で正会員と同様に会費納入済みになります。これまでも

就職活動への支援をはじめ、桜友会は在学生向けの様々な対応をしてきましたが、これからは「学生会員」を桜友会の輪の中に一層取り込んでいくことが求められます。

在校生と桜友会を結びつける絆として、輔仁会各部のOB、OGの役割はとくに重要です。スポーツ各部はもちろん、文化サークルも含めて、優れた業績を顕彰するなど、部活動を盛り立てていくのは、卒業生の務めだと考えます。部活に打ち込み、充実した学園生活を過ごした記憶が母校愛の源であることは、会員多数の皆さんがよくご承知のことでしょう。

会員向け活動の充実については、本部と全国支部の連携を強化していくことを第一に、各支部の活動の一層の活性化に期待しております。学習院公開講演（6月長野市、11月さいたま市）での地元会員のご奮闘ぶりには本当に頭が下がります。院長はじめ学校幹部との温かい交流は、「学習院らしさ」の表れでもあります。

7月の新潟県中越沖地震では、日赤救護チームの一員として被災直後の柏崎市、刈羽村に入った新潟桜友会会員の方から事務局にメールで現地の模様を伝えていただき、これがきっかけで被災地の会員にお見舞い状を送りました。災害に際して桜友会ができることは限られていますが、これからも万一の場合は現地との連絡を密にして、被災地の会員にせめて励ましの言葉を届けたいと思います。